

短期間日本を離れたことで人生観や価値観が一変

寺尾和子（20回生、薬剤師）

メディカル パースペクティブス（株）

高1の途中で新宿高校に転校してきた私は、環境の変化に適応できず、すっかり学習意欲を喪失してしまいました。進路を決める段階になっても落ちこぼれ状態が続いていましたが、3歳年上の姉が薬学に進んでいたこと、また、『資格を取れば人生困ることはないだろう』というごく安易な考えで、薬学に行くことを決めました。一浪して晴れて薬学に進んだものの、学生運動が吹き荒れる中、『生きる意味』を探しながら過ごした4年間でした。卒業して薬剤師の資格を取得、運もあって大手製薬企業に入りましたが、自分のやりたいことは他にあるように感じ、その後10年という長きにわたって迷い続けた後、いつしか『他の仕事で生きよう』との思いが芽生えていました。

まずは英語力をと、英国に短期語学留学し、6カ月間の猛勉強の末にケンブリッジ英語検定 First Certificate in English を取得しました。異国の地で貯金も底をつき、貧乏暮らしの心細さを味わったこともあって、帰国後は高収入の得られる仕事を、との思いが強くなり、いつしか薬学知識と英語力の両方を活かそうという考えに変わっていたのです。わずか6カ月間日本を離れたことで人生観や価値観がまるで変わってしまい、自分でも驚くほどポジティブになっていました。

英語力をつければ世界が変わる！

専門知識に英語力が加われば世界が変わります。当時は薬剤師でビジネスに通用する英語力のある人はごく限られていました。製薬企業勤務中に取得した英検1級のおかげで、私は30代後半に国際的医学出版社（本社：米国・英国）に転職することができ、人生が一変しました。国際学会議の取材・出版物発行、本社での編集会議、医学書・ジャーナル制作等、すべてが未経験でしたが、医学の最先端情報を収集し活字にして伝えるという仕事に必死に取り組んでいくうち、自分がやりたかった仕事はこれだと思えるようになりました。無我夢中で働いた10年後

に独立し、小さいながらも医学出版社を設立、その翌年にはロンドンに支社を開設しました。

生命という、『不思議ワールド』— 生命のしくみの凄さにワクワク！

細胞が活動を維持するために行っている絶え間ない合成や分解（そして不要物の細胞外への排出）、細胞間で行われている多様で巧妙なコミュニケーション— 『生命』は謎だらけです。ヒトの体質の多様性、疾患の多様性が明らかになりつつある中、『遺伝子治療』やiPS細胞を用いた『細胞治療』の実現に向けて、『薬』や『治療』の概念は大きく変わり始めています。尿や血液1滴、あるいは呼気でがんの有無を診断できるようになり、また、疾病診断や読影、治療計画の立案、ロボットによる外科手術など、AIやビッグデータのさらなる応用が期待されるなど、医学や科学技術の進展はまさに日進月歩の勢いです。私の目下最大の関心事のひとつは医療において大きな可能性を持つと考えられる水素（H₂）です。医療費削減にもつながることを大いに期待しています。

これからの薬剤師に求められるもの

医療・ヘルスケア分野の進展を背景に、厚労省は『健康サポート薬局』の在り方を提示し、生活習慣病の予防や改善に寄与する栄養（食事）、運動、薬の飲み方等に関するサポートを通して、地域住民の健康維持・増進に貢献できる、質の高い薬剤師の育成を提案しています。『食』（何をどう食べるか）は病気予防の観点からも重要です。薬剤師の役割は、伝える手段が出版物であれ、対面コミュニケーションであれ、その専門知識や最新情報を人々の健康回復・増進のために役立てることであり、より積極的な活躍が強く求められています。

さまざまな迷いや不安、悩みを抱えることは誰にでもあることですが、最終的には自分で考えて決めることが重要です。どんなに行き詰まりを感じていても、努力していれば道は必ず開けると信じます。

（朝陽同窓会のご協力を得て「先輩からの言葉」を掲載しています。）